

筆山

第57号／2014年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/ 中平 公美子 (59回)

発行人/ 関東支部幹事長 市川 直介 (53回)

関東支部ホームページ : <http://www.tosako-kanto.org/>



広がる・繋がる・将棋の輪

六歳で将棋を覚え、女流棋士としてデビューしたのが一九九六年四月、土佐高校一年の時でした。在学中は月に一回ほど対局の度に東京に通い、二十歳の頃に上京。以来、対局を中心に普及など様々な活動をしています。現在は公益社団法人日本女子プロ将棋協会(LPSA)に所属し、今年二月より理事を務めさせていただいております。

この度「筆山」への執筆依頼をいただき、喜んでお引き受けさせていただきました。日頃の活動をご紹介させていただく機会に恵まれ、感謝しております。

対局は月に一〜三回ほど。仲間が集まって練習将棋をする研究会や、子供に教える教室や大会・イベントでの審判や指導対局、企業将棋部でのお稽古など、日々いろいろ。

定期的なお仕事の一つに、「LPSA将棋サロン in DIS」があります。囲碁サロンの一室をお借りして、女流棋士が交代でお客様と指導対局を指します。このサロンに、土佐校四十回生の先輩がいらしてくれました！今年六月の関東支部同窓会(四の回担当)でチラシをもらったから、とのこと。大変感激致しました。

また、個人的にも様々なイベントを企画しており、三月に開催した囲碁・将棋・麻雀の女流プロによるトークイベント『勝負師の彼女じゃイヤですか?』にも三十七回生の先輩がご来場くださり、大変嬉しかったです。

他にも、音楽好きが高じて『将棋が指せるDJイベント nagomi』を二〇一二年より主催しております。「音楽好きな若者に、気軽に将棋に触れてもらうきっかけ作り」をコンセプトに、自分らしい普及をしたいという想いで立ち上げました。今年八月には念願の高知開催も実現し、土佐校の同級生や先輩がたくさん遊びに来てくださり、幸せな時間を過ごす事が出来ました。

今後も将棋を通じて皆様と交流を深めていければと思いますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

第17回 はちきん会

東京・銀座にある瀟洒なビル…。日本を代表する建築家、伊東豊雄氏がデザインしたものだという。1階には宝石店「ミキモト」が入り、その脇のエレベータで8階へと向かう。扉が開くと広々としたオープンキッチンが広がり、早くも鼻孔をくすぐる香りが漂ってくる。店内のエレベータでさらに上階のフロアへ。そこは、まばゆいばかりのスワロフスキーの装飾に、宇宙船のような巨大ワインセラーがそびえる会場…。え、ここでハチキン会やるが？え、これで5000円なが？え、テーマはワインなが？えええ？？

そんな驚きとともに幕を開けた今年のはちきん会。今回で17回を迎えました。これまでで最も多い、土佐のはちキンとその仲間たち104人が大集結しました。



2014年10月4日

銀座「RESTAURANT DAZZLE」にて

■テーマは「ワイン」、講師は「シニアソムリエ」濱田さん！

現在シニアソムリエとして活躍する濱田知佐さん(56回生)を講師に迎え、ワインをテーマに講演していただきました。濱田さんは、田崎真也ワインサロンで取締役支配人を務めた経歴をもち、その手腕を買われ現在は、高知県のアンテナショップレストラン「おきゃく」のマネージャーも務める才女。土佐弁まじりの快活なジョークが響き、会場は終始和やかなムードに包まれました。



香りを嗅ぐときは「効き鼻」で！
など、まずはワイ

ンの基礎をみっちりお勉強。その後は、待ちに待った“実習”タイム。お料理をいただきながら、赤・白それぞれ2種類のワインを飲み比べては、あーでもない、こーでもない…。10代から80代までの老若男女が、世代を超えてワイン談義に花を咲かせた、あっという間の2時間半となりました。

■ ナイトは、森郁夫さん

ハチキン会を金銭面で支えてくださっている「ナイト」。今年は、「富士重工業株式会社」前社長である森郁夫さん(41回生)が引き受けてくださいました。はちきん一同、心からの感謝を込めて花束の贈呈です。



■ はちきん会、私はこう思った！



初めての参加にも関わらず、土佐OGの先輩方は温かく迎えてくださいました。女性としてのキャリアや結婚・出産など、人生を楽しみながら生き生き過ごす先輩たちがたくさんいます。若さ故の失態も少しくらいなら大目に見てくれるバワフルさと聡明な美しさを兼ね備えた方々ばかりです。会わなきゃ損です。 85回 中平彩夏



ワイン講習でワインの特徴を学んだことで、お料理を「よりおいしく」楽しむことができました。はちきん会は、先輩方の豊富な経験談を伺い刺激となる場所であると同時に、明るく暖かいアットホームな雰囲気も魅力だと思います。素敵な会をありがとうございました。76回 金澤卓子



ハチキンのロールモデルである濱田先輩の貴重なワイン講座を拝聴しながら、一同美味しい料理に舌鼓を打ち、銀座の Trendy なレストランが土佐弁トークとハチキンの熱気に包まれるのを感じました。76回 宮村円絵

濱田さんのナビゲートで、ワインの世界を楽しめました。ワインというと敷居が高いイメージですが、すごくわかりやすい構成で、もっと勉強したくなりました。素敵な空間で素敵な時間を、本当にありがとうございました。

64回 小島真知

■ 会長交代…「はちきん会」は新時代へ

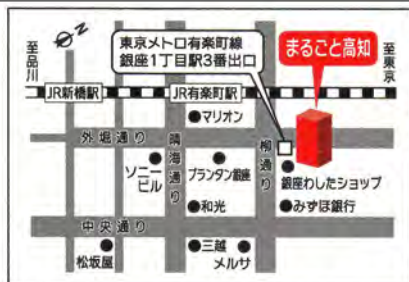
これまではちきん会の開催に尽力された佐々木泰子会長(33回生)が、今回をもって会長を退任されました。佐々木さんの朗らかな人柄と、柔らかな笑顔に魅了されたナイトの皆さんも多かったのではないのでしょうか。佐々木さんは、はちきん女子の憧れでもありました。これまで本当にお疲れさまでした。新会長には、今回講師を務めた濱田知佐さんが就任されました。新会長・濱田さんから、旧会長・佐々木さんへ、感謝を込めて花束贈呈です。会長交代により、新たな時代を迎えたはちきん会。更なる

今回初めてハチキン会に参加しました。まず多くの男性もいらしたことに驚き、土佐高の女子達の在校時にも増して、深く頼もしい姿に納得のひと時でした。ワインテイスティングもぜひ。 46回 諸岡恵子

パワーアップにご期待下さい。皆さん、来年も是非お気軽にお越し下さいね。

おきやく
TOSA DINING

一般財団法人
高知県産外務公社
プロデューサー
濱田知佐(56回生)
アルバイト
西村希生(83回生)
井澤尚子(84回生)
和泉侑吾(87回生)
泰原 健(87回生)
下田 優(87回生)
高木菜水(88回生)
清岡玲布(88回生)



www.marugotokochi.com/
Tel 03-3538-4351 (サンゴ・血鉢・ヨサコイ)
〒104-0061 東京都中央区銀座1-3-13



向陽新聞に見る土佐中高の歩み ⑩ —新校舎建設中の世代— 48回 水田 幹久

昭和45年
～47年
(1970～1972)



年	主な出来事	土佐校新校舎建設
1969年 (昭和44年)	東大田講堂占拠 日本のGNP西側世界で第2位に	
1970年 (昭和45年)	日航「よど号」事件 大阪万国博覧会／日米安保自動継続 三島由紀夫自殺事件	現在校舎の場所に建設する方針決定 8月7日起工式
1971年 (昭和46年)	ニクソンショック ～ドル・円変動相場制移行 成田空港反対闘争	4月30日中央棟、 高校棟（第1期工事）完成 5月8日校舎使用開始
1972年 (昭和47年)	日中国交正常化／沖縄返還 浅間山荘事件 グアムで元日本兵横井さん救出	3月28日中学棟（第2期工事）完成 4月校舎使用開始
1973年 (昭和48年)	第4次中東戦争契機に 第1次オイルショック	3月31日体育館、食堂（第3期工事） 完成（昭和50年7月25mプール完成）

(表1) 土佐校新校舎建設時期の主な出来事

(注) 新校舎とは、1971年～2009年の間、使用した校舎のこと。
現在、旧校舎と呼ばれる校舎を指します。

私の担当する七〇年（昭和四五年）から七二年（昭和四七年）の世相を見てみると、学生運動が下火となっていく時代であり、七一年ニクソンショックで円は変動相場制に移行（一ドル三六〇円時代が終わる）、七三年オイルショックにより経済成長にかげりが見え始める時期である。その様な時代背景のなか、土佐校は新校舎建設に着手し、この時期は建設

である。以降、在校生の新校舎に関する関心は高まり、校舎完成までの期間、毎号新校舎や施設に関する記事が掲載されるようになる。八三号でも、早速在校生にアンケートを取り、四五％程がなお移転を望んでいることを伝えている。（中学低学年には実現が早い現敷地建設、高校高学年には移転希望が多い結果になっている）

曾我部校長が新校舎の建設計画を言明したのは六四年のことであり、創立五十周年の七〇年竣工を目指していた。当初は現校舎の敷地の狭さ、周辺の交通量の多さ、大気環境の悪さなどの理由から移転する計画であったが、用地取得の目処が立たないまま、七〇年を迎えた。七〇年以前の向陽新聞には、新校舎建設計画がなかなか進まない状況をやや諦め気味に伝える記事が、度々登場した。その状況が大きく変化したのが、七〇年三月十四日の八三号「六月中に着工か？」という、現敷地建設の方針が決定されたことを伝える記事

新校舎建設開始の経緯と その当時の生徒意識

中の校舎を使用しながらの学生生活であった。本稿で言う新校舎は現在ではさらに建て替えられ、今では旧校舎と呼ばれているようである。
時代背景を分かりやすくするために、この時期の主なニュースと土佐校新校舎建設の過程を並べたものを表に示す。（表1参照）

また、生徒会も学校側からの要請を受けて、新設する設備、改善を求める設備など、生徒の希望を提出している。新設希望では個人用ロッカー、冷暖房設備、改善希望では食堂、体育館、便所が上位にあった。
運動部の要望については、広いグラウンド、広い体育館を求める希望が多く、八四号のコラム「土佐校七不思議」に面白い結果が報じられている。理想と現実のギャップの大きさを感じさせる結果である（記事中の地図を参照）。

また、八四号では設計に生徒会の要望があまり取り入れられていないことを報じるなど、新聞部は紙面を通じて生徒の要望を叶えるよう訴えている。

工事期間中の苦勞



↑実線が当時の土佐校敷地。点線で囲まれたエリアが運動部希望の面積。面積合計7万5千㎡となり、電車通りから潮江中学校に達する。

第一期工事は旧校舎を使ながら、グラウンド部分で工事を行った。そのため、校舎の一部が工事に架かり、スペースのやり繰りが必要であった（八六号）。

「声」欄への中学三年生の投稿によれば、工事により中三のA、B、Cの三クラスは元理科共通教室、元柔道場、元技術室に移動、そこでの授業環境の悪さが訴えられた。この記事掲載後、特に環境が悪いAクラスは再度教室を移動した。

・グラウンドの使用不能により運動部の活動が大幅制限される。
・自転車置場不足と置場周辺の混雑。

運動部は新グラウンドで以前に比べ縮小して実施。

また、七一年三月一三日の八八号は、七一年度の中一の募集定員を三百人に戻すことが決定

されたと報じている。これは、新校舎建設に伴う教室不足のため、七〇年度の募集定員を二四〇人に減らしていたが、一期工事完成による教室不足解消の目処が立ったため、元の三百人に戻すものである。このことを見てもギリギリのやり繰りで教室を確保しながら、現校舎の敷地に新校舎を建設した様子が伺われる。

それまで新校舎建設に対して、様々な注文を付けてきた向陽新聞も、第一期工事が完成した時には、七一年五月二十五日の八九号で「新校舎その威容を表す」「明るくなった教室」と完成の喜びを報じている。そして四月三十日の完成の後、五月六、七日に全校生徒による引越し作業が行われ、八日から新校舎で授業が開始された。

その後、九〇号では自転車置場の不足解消を求める記事、九一号では新校舎を旧校舎感覚で掃除するのではなく綺麗に保つよう生徒に呼びかける記事が続き、九二号で第二期工事である中学棟の竣工が報じられている。

次に、本稿の対象期間の記事から、いくつか拾ってみた。いて、新聞部が問題提起を行つたものである。木造校舎時代の食堂をご存知ない世代の方はイメージが難しいかも知れないが、当時の食堂は、メニューはうどん、そば、日本そばの三品だけで、昼休み時間に約八百食を提供していた。一人で二杯食べる者が大多数であったため、一日四百人強の利用者があつた。弁当持参でない生徒にとつて、食堂は食堂利用が売店のパン購入の二つの選択肢しかなかった。

食堂問題について

まず本校の食堂がかかえる問題点について。これは食堂の従業員が怪我により休むことになり、一時食堂が休業したことによって、食堂のあり方について、

怪我で休んだ従業員の代わりはなかなか見つからず（待遇の悪さが主な理由）、再開後も四分の一程度の量しか提供できない状況が続いた（八七号）。食堂の機能を安定的に維持できる、校長は「昼食は弁当持参が本来の姿で、食堂は弁当持参できない人のために補完的に有る施設」との認識を示した。この認識に対して、新聞部は紙面を通して、食堂は学校には不可欠な機能なので充実、安定させることを要望した。その理由として、共働き世帯の増加により、母親が弁当を作るのが当たり前ではなくなつて、

ている時代の変化。生徒も通学時の荷物が増加していることなどをあげた。その後八九号ではうどん類の値上げを伴うものの、労働条件改善の動きがあることが報じられている。そして、建設後の新校舎では食堂機能が大幅に改善されている。

「五十年目の墮落」現象

八五号の一面トップは「五〇年目の墮落」との見出しで、生徒のモラル低下に注意を促す記事が掲載された。飲酒等による処分者が多く出たことから、校内のモラルを見直したものである。図書館の蔵書紛失、掃除のさぼり・不徹底、食堂・売店での割り込み・頼み込みなどの現象が見られ、処分者がでた事実と比べれば軽微であるが、モラルの低下を感じさせる結果であつた。この年が創立五〇周年であつたため、冒頭のやや刺激的な見出しが使用された。この記事には予想以上の反響があり、先生方による分科会結成に発展した。先生方が四つの分科会のいずれかに所属し、①教育方針・教育内容について②生徒をどう把握するか③諸規則の再検討④教師の研修について、テーマ毎に土佐校教育のあり方を再検討することとなった（八六号）。

終わり

新校舎建設中のエピソードに偏ってしまったこと、ご容赦願いたい。新校舎建設の陰に隠れた重要なことを書き漏らしていないかどうか心配ではあるが、ここまでしておきたい。

改めてこの時期の向陽新聞記事を読み返すと、まだ学生運動から受けた影響が残っているのか、新校舎建設に関する要望、食堂の改善要求、先生方の分科会に期待する要求、本稿で触れていないが授業料値上げへの反対、文化部の活動を制限する動きへの反発など、学校・校長先生に対する要求が目立つ（しかも厳しい口調）。時代は安田講堂占拠から浅間山荘事件にかけての期間であるので、学生運動の凋落を感じているはずであるが、その影響から完全には逃れられていないのかも知れない。資金調達に苦労しながら新校舎を建設した曾我部校長の視点から見れば、新聞部はなんとも小うるさい生徒達に見えていたことであろう。

六月中に着工か？



→現在の敷地に建設が決定したことを伝える記事。ここに至る経緯からか、すんなり着工されるだろうか？との思いが行間感じられる。

明るくなった教室



→長年の希望が叶い新校舎第一期工事完成。引越し風景にも喜びが感じられる。

引越した教室の様子。明るく、清潔な環境が、生徒たちの学習意欲を高めることが期待されている。

この向陽新聞に見る土佐中学の歩みの連載は、今回で一旦終了となります。向陽新聞は本稿の期間以降も発行が継続されていますので、この後、続編を書いていく下さる方の連載再開を期待したいと思います。

母 校 便 り

学校長 山本 芳夫 (40回生)



関東支部同窓生の皆様におかれては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は母校に対し格別のご厚情とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

〇創立百周年に向けて

土佐校の創立記念日は一九二〇年(大正九年)でありますので、今から六年後の東京オリンピック・パリンピックが開催される二〇二〇年(平成三十二年)に創立百周年を迎えることとなります。そこで、このメモリアルイベントに向けた動きが既に始まっており、その第一歩として、「百周年に向けて土佐中高のあるべき姿」を検討していただく「第二次百年委員会」が理事長の諮問機関として組織されました。本委員会は、高知工科大の岡村甫理事長(三二回生)を委員長として同窓生十三名の委員で構成されており、その答申が今年度を目処に出される予定と伺っております。本答申を受け、学校として取り組むべき具体的施策や記念事業の検討を進めたいと考えています。

〇第六七回運動会など学校行事について

秋分の日(九月二三日)。高三生(九十回生)が創意を凝らし制作した橋が立ち並び、今や初秋の風物詩となった運動会が、爽やかな秋空の下で三千名を優に超える来場者を迎え、盛大に行われました。長い歴史の中で練り上げられたスピーディーに展開される各種競技・演目の数々とそれに直向きに取り組む生徒達の姿は、多くの観衆の感動を呼びました。そして、何よりも、協力一一致でやり遂げた全土佐中高生の心に、

(日)となります。尚、これからこの主な学校行事は、十一月が高一生の修学旅行、年明けの一月が高校卒業式、二月は向陽祭、中二生のスキー研修(新潟・越後湯沢)、そして、三月の中学卒業式と続きます。



〇高一生の修学旅行について

高一生の修学旅行(東京・京都)は、十一月十七日から二日の予定(東京の日程は前半三泊)で行われますが、特に、東京二日目に予定しているコース別研修に期待を膨らませております。訪問先の同窓生の皆様には何かとお世話になりますかどうかが宜しく願っています。(この「筆山」をご覧になる時点で既に訪問が終わっていると思いますが、色々お世話いただき有難うございました。)

なにかんなく最終学年生の胸深くに、忘れがたい思い出として刻み込まれたものと思います。この日を境に、高三生はいよいよ大学受験に向けて最終段階に入っております。既卒生を含め受験生全員の志望が叶うことをひたすら願うものであります。センター試験は明年一月十七日(土)・十八日

(平成二六年十月末 記)

母校／同窓会本部／各支部

土佐中学・高等学校 事務局 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394 (FAX)088-833-7373 (E-mail)tosa@tosa.ed.jp (HP)http://www.tosa.ed.jp/index.html
土佐中学・高等学校同窓会本部 会計幹事 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL)088-833-4394 (FAX)088-833-7373 (E-mail)tosa@tosa.ed.jp (HP)http://www.tosaobog.com/
北海道支部 事務局長 山本隆昭 〒001-0018 札幌市北区北18条西6丁目 ARTE 88-305
(TEL)011-756-2817 (FAX)011-756-2817 (E-mail)yamat@den.hokudai.ac.jp
東海支部 事務局長 瀬沼憲司 〒455-0064 名古屋港区本宮町6-7-5 フォレスト本宮201
(E-mail)knzss@kza.biglobe.ne.jp (HP)http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/
関西支部 幹事長 原田和人 〒662-0015 西宮市甲陽園本庄町6-67-205 原田方
(TEL)090-1073-7822 (FAX)ナシ (E-mail)harada73@hotmail.com (HP)http://www.tosa-ko.org/kansai/
広島支部 事務局長 大谷準一 〒734-0007広島市南区皆実町6-3-26-902 (TEL)082-253-5759
(FAX)082-254-7523 (Email)spat5629@vesta.ocn.ne.jp (HP)http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/
香川支部 事務局長 野村喜久(担当:福原俊介) 〒760-8573 高松市丸の内2番5号 四国電力(株)
(TEL)090-7780-3722 (FAX)ナシ (E-mail)fukuhara14443@yonden.co.jp
関東支部 事務局長 二宮潔 〒100-8222千代田区丸の内2-6-1丸の内パークビルディング
森・濱田松本法律事務所 弁護士市川直介 気付
(TEL)03-5223-7719 (FAX)03-5223-7619 (E-mail)naosuke.ichikawa@mhmjapan.com

関東支部便り ～イベント情報～

詳しくは、関東支部HPをご覧ください。<http://www.tosako-kanto.org/>
お誘いあわせの上、ご参加いただきますようによりしくお願いいたします。

1. 学生・若手社会人交流会

日程：平成26年12月20日（土）
時間：受付 14時から
講演 14時30分～16時
交流会 16～18時
場所：東京大学駒場キャンパス
生協食堂2階（ダイニング銀杏）

講演内容

安田雅彦氏（52回生）
『2020 外国人にも誇りたい
高知の魅力』
みんなあで再勉強～基礎知識篇

参加資格に制限はありません。

服装はカジュアルで結構です。

同窓の学生に何か伝えたいという気持ちのある
卒業生は誰でも「若手社会人」です。参加申し
込みは、関東支部HPのQRコードから。

2. 2015年関東支部総会

日程：平成27年6月6日（土）
時間：15時から
場所：東海大学校友会館
（霞が関ビル35階）
平成27年の懇親会幹事年は、卒業回生末尾5
の回生の方たちです。

3. 筆山会新年会

日程：平成27年1月10日（土）
時間：受付 11時30分から
新年会 12～14時
場所：代々木倶楽部 1F
アザリア
渋谷区代々木3-59-9

4. 2015年学年幹事会

日程：平成27年2月21日（土）
時間：16時から
場所：東海大学校友会館
（霞が関ビル35階）

筆山編集委員 募集中

『筆山』の編集委員になりませんか。年二回（7月・
12月）発行のため、主な活動時期は5～6月と10～
11月です。

先輩・後輩の活躍を間近に感じながら、紙面を作っ
ていきましょう。興味のある方は、編集長・中平までご連
絡ください。記事にしてほしい出来事もお知らせくださ
い。（右写真：筆山編集委員）

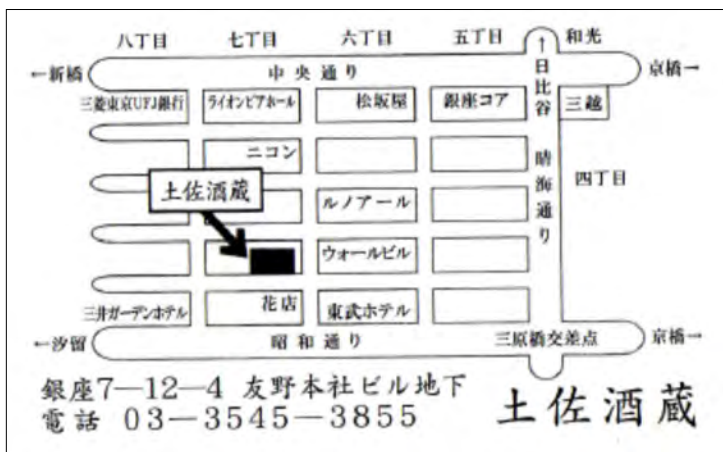
編集長・中平公美子（59回生）

kumikochun0411@gmail.com



お悔やみ申し上げます

35T	荒川 修一	2013. 11. 2
39S	杉村 茂	2013. 12. 10
39O	竹邑 類	2013. 12. 11
36K	掛水 清志	2014. 1. 11
34S	渡辺 靖夫	2014. 1. 30
17	玉木 幸彦	2014. 1. 31
33H	千島 卓	2014. 2. 17
31H	高松 康彦	2014. 3. 6
36T	田村 裕	2014. 3. 16
34T	酒井 正洋	2014. 3. 31
31O	須藤 悟	2014. 3. 31
35S	森 誠	2014. 7. 16
25	秋田 浩	2014. 7. 16
47K	山本 宗一	2014. 8. 10
47T	森 裕司	2014. 9. 17



小松岳志（こまつ たけし）

70回生。森・濱田松本法律事務所シンガポールオフィス共同代表パートナー弁護士。
2012年よりシンガポール在住。

海外からの報告

2. アジアでM&Aをやっています

この頃日本企業は特に東南アジアで活発にM&Aを行っています。日本の市場が縮小し、また、世界の中でも伸びが期待できる国が東南アジア周辺に集中しているからです。

私のメインの仕事は、東南アジアからインドにかけての国々で日本企業がM&Aや合併の形で事業を拡大することのお手伝いをするのです。

特に、シンガポールからは、日本企業の投資が活発なインドネシア、タイ、マレーシア、ミャンマーなどの周りの国には、いずれも飛行機で1時間から3時間かければ行くことができるので、日本の国内出張の感覚でそれぞれの国に行って現地でクライアントのために交渉しています。

アジアの各地の現地の交渉相手は、個性が強く、すぐ感情的にもなるところがあり、あまりM&Aに慣れていないこともあるので誤解から変なところでこだわりを見せるなど難しい部分が多々あります。

他方で、相手方の弁護士でも信頼に足る相手だと見れば腹を割って話してくれるところもあり、決断も早いという特徴もあります。ですので、特に、交渉相手とも信頼関係をうまく作って、懐に入り込むという技術を実戦の中で高めていく面白さがあります。

交渉相手といっても、日本企業のクライアントにとっては、ビジネスパートナーでもあるので、交渉相手との間でこのような立ち回りができて、かつ、交渉でも有利な条件の獲得に成功すれば、とても喜んでもらえます。



1. ミャンマーで法律を作っています

70回生の小松岳志です。海外にいる卒業生からの近況報告ということで、第1回の担当を仰せつかりました。

私は2011年末まで東京にいて法律事務所働きながら、土佐高同窓会の関東支部や若手の会の活動をやっておりました。その後2012年1月からシンガポールに所属法律事務所のオフィスを立ち上げるために赴任し、ほぼ丸3年になります。お陰さまで、家族ともども元気に楽しく暮らしています。

仕事の面でも、当初弁護士3人とスタッフ3人だったシンガポールオフィスも、弁護士30名とスタッフ6名に増え、ミャンマーのヤンゴンにもオフィスを作り、弁護士3人とスタッフ2名が所属しています。

日々アジア各地を飛び回り、日本企業や現地の企業の代理人として交渉やアドバイスをしていますが、特に面白いのが、ミャンマーでの法律作りです。

ミャンマーについては、日本のTVなどでもかなり紹介されているようなのでご存知の方も多いと思いますが、第二次世界大戦後社会主義政権になってから2011年ごろまでは長い間鎖国に近い状態で外国との交流をほとんどしてこなかった東南アジアの国です。

シンガポールにオフィスを開いた2012年からちょうど開放政策が始まり、現代に合わせた法律作りが進んでいます。日本の法務省からミャンマーの法制度を調査するプロジェクトの委託をいただいたことをきっかけに、日本の財務省のワーキンググループ委員として、ミャンマーに初めての証券取引所を作るために証券取引法制の整備のお手伝いをしています。

また、ミャンマーでは100年前の会社法を改正しようという動きもあり、そちらについてもお手伝いしています。

左の写真は、証券取引法整備支援のためにミャンマーを訪れた際に会議の場で現地の正装（ロンジーという袴で、現地では皆いまだにこれを着ています）にて撮った写真です。

私が日本の法務省で会社法の改正を担当していたときの経験も活かすことができ、また、明治維新後の日本のような、一つの国のまきに国造りに関与できる仕事は大変やりがいがあります。

ふるさとへの手紙 (十九)

井澤尚子 (84回)

上京して五年。地下鉄の乗り換えも、人ごみのかき分け方も、何となく板に付いてきました。自分でも、端から見たら、昔自分が嫌いだった「冷たい都会人」に見えるんだらうなと寂しく感じます。今回、筆山寄稿のお話を頂き、改めて高校卒業以来の自分を振り返ってみたいと思いました。

現在、一橋大学社会学部五年生に在籍しております。上京当時の私には夢がありました。社会問題を多くの人に知ってもらうため、テレビ局のディレクターになりたいというものでした。絶対夢を叶える！という頑なな決意と共に上京したのを覚えています。

ただ、大学生活は想像以上に刺激が多かった(笑)。大学そっちのけで友達と遊んだり、球場のビール売り子のアルバイトに注力したり。幼い頃から憧れていた、一年間のアメリカ留学や、アイスランドでのボランティア等、とにかくやりたいことは全部手を出しました。それらの中で、年齢層も国籍も飛び越えて沢山の方々に出会い、いつの間にか、自分の将来に対する考え方や、生活の価値観も大きく変わっていました。例えば、物事を「伝える」立場ではなく、自分で物事を動かす何か変化を起こせるような、具



る土佐ダイニング「おきやく」でホールス

タッフとして働いております。高知出身で現在東京で活躍されている方々に多くお会いしますが、皆様とてもオープンでさくしく話しかけて下さいます。お客様どうして仲良くなることもしばしば。そういった光景を日常的に見ていると、高知県人って、何にでも誰にでもオープンで、新しい世界に飛び出そうとする勢いが凄いな、と改めて感じます。そんな「高知県人魂」があったからこそ、私も東京で大きな変化を経験できたのかなと思います。見た目は、冒頭の「冷たい都会人」になっても、内側はいつまでもアツイ高知県人魂を持っていたいものです。

最後になりましたが、今回の貴重な機会を与えて下さった「筆山」編集部の方々、そして私のこれまでの成長に関わって下さった全ての方々に、改めて御礼申し上げます。

3. 日本と高知のよさをアジアに発信していこう

シンガポールに住みながらアジア各国を訪れてみて特に感じるのは、日本は本当によい国だということです。自然の美しさ、食べ物のおいしさ、安全や信頼という価値観が共有されていることなど本当に素晴らしいと思います。アジアの方々も日本が大好きな人がたくさんいます。

ただ、まだまだ紹介できる日本のよいところはたくさんあります。たとえば、われらが高知県は、やはりまだアジアには知られていません。私はたまたま高知県観光特使に任命していただいていることもあり、チャンスがあればアジアの方々にも特使名刺を渡したり、高知県の観光スポットの英語パンフレットを渡したりしています。ただ残念ながら交通の便がよくないことと海外に知られている観光スポットがないこと、そして、高知の売りである坂本龍馬はじめとした歴史上の人物はアジアの方々にはアピールしないことからまだ十分によさを知ってもらうことができていません。

もっとも、いろいろとやり方はあると思います。例えば、おそらく東南アジアには日本よりきれいな川がある国はないと思います。であれば、「日本最後の清流」四万十川は、「アジア最後の清流」です。今後はそのようにしてアジアも視野に入れた売込みを最初からやっていくような時代になっていると思います。

私もまだアジアの友人を高知に連れていくところまではできていませんが、先日、インドネシアとシンガポールの友人を鎌倉に連れていきました。写真はそのときのランチのときのものです。皆、鎌倉の古きよき神社仏閣を中心とした緑と海に囲まれた街並みと食事の美味しさに感動していました。このような活動を地道に続けて、日本と高知のよさをアジアに伝えていきたいと思っています。(完)



中城正堯氏(三十回)の講演 「浮世絵に描かれた子どもたち」

七月八日から八月三日まで千葉市美術館で「浮世絵に描かれた子どもたち」をテーマとした浮世絵特別展示が催され、会期中の七月十九日(土)に国際浮世絵学会理事・中城正堯氏(三十回)の講演が同所で行われた。講演当日は約百名の聴講者があり土佐高OBも十名程度出席した。

同美術館にはこの期間に、中城氏が蒐集した公文教育研究会所蔵の二千点以上の浮世絵コレクションから約三百点が特別展示された。氏はそれから更に重要な浮世絵を抽出して、テーマに沿って、浮世絵に描かれた「江戸時代の子どもたち」について講演した。博覧強記の中城氏は、浮世絵に描かれた子どもたちを語るのに、江戸時代の文献(守貞漫稿、嬉遊笑覧、江戸名所図会等)から必要な箇所を引用して解説していた。講演要旨のごく一部を抜粋すると次の通り。



浮世絵のテーマは風景画、美人画、役者絵、等々あるが、子供も浮世絵の重要なテーマの一つであった。明治初期に來日した外国人は日本人が子供を大切にしているのを見て驚いている(モース等)。西洋にはこれほど子供に親切を尽くす習慣はない。世情が安定し家が重視された江戸時代は特に子供が大切に扱われた。鈴木春信、鳥居清長、喜多川歌麿、歌川広重、歌川国芳等の一流浮世絵師によって、日常生活、遊び、教育(寺子屋、季節の行事等々)子供のあらゆる状態が描かれた。特に広重は暖かい視線から子供を生き生きと描いている。寺子屋における濃厚な師弟関係があり、また地域あげての子育てが行われ、色々な玩具が与えられ、いろんな遊びに興じて、江戸時代は子供たちにとって楽しい時代だった。地域あげての子育てというものがあるが、少なくない、ぎすぎすした家族関係も多い現代だからこそ江戸時代の愛情細やかな家族像に思いをはせる意味があるように思う。

(四一回 西岡恒憲)

第二一〇回 日本精神神経学会学術総会

四九回 宮岡等(北里大学医学部精神科主任教授)

村木厚子さんを招いて

二〇一四年六月二六・二七・二八日に横浜(パシフィコ横浜)において、第一一〇回日本精神神経学会学術総会を会長として担当しました。本学会は第一回総会が1902年(明治三五年)に開かれており、精神科領域では最も歴史があり、規模の大きい学会です。

本総会はメインテーマを「世界を

変える精神医学へ地域連携からはじまる国際化」としました。精神医学という科学は普遍性を求められており、日本の精神医学研究は国際的なレベルに達しているといえます。一方、現場の精神医療は地域の特性に合わせる必要があります。その第一歩が地域連携です。そんな中、北里大学精神科でも力を入れている課題が地域連携ですので、このテーマに決めました。

特別講演では厚生労働事務次官の村木厚子さんが「女性医師の働きやすい職場」と題して、現状の問題を鋭く指摘し、わかりやすく説明してくださいました。自分が大きな学会を担当する時は誰か学生時代の仲間を招きたいという夢があったのですが、この時期に土佐中、土佐高と六年間同じ校舎で過ごした村木さんを招き、自分が座長を担当して講演していただけたことは望外の喜びでした。このことを報告したく、今回は「筆山」への掲載をお願いしました。こういう大きな学会で会長の



左から坂本宏さん(国立病院機構北陸病院院長・精神科医)、村木厚子さん、宮岡等(三人とも土佐高四九回生)



土佐婚俱樂部
TOSAKON CLUB

人世の最良のパートナー探しを
心を込めてサポート致します。
見学やご相談もお気軽に 東京相談室まで

代表・東京相談室長 織田祐輔(45回生)
〒190-0012 東京都立川市曙町1-12-19 吉田ビル401
TEL 042-521-2020 ホームページ <http://tosakonclub.com>

個性を出すというのも難しいのですが、今回は「どこから薬物療法を実施すべきか」、「大人になってから見いだされる自閉症スペクトラム障害」、「精神療法、カウンセリングの副作用」などの会長企画シンポジウム、利益相反に関する講演などで多少は会長色を出せたと考えております。終わってみれば、本学会史上最も多い八千四百名余の方に参加していただくことができました。

ある有名高校は同窓生の精神科医の会があるというのを聞いて、土佐校出身の精神科医が今後もっと連携できることを願っています。

江戸百景(六) 江戸の夕立



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>より新大橋東詰一帯。
(芭蕉没して150年後の切絵図である。)



(上)歌川広重「名所江戸百景」より「大はしあたけの夕立」(安政三年-1856)。



(上)現在の新大橋。江戸時代は、ここより200米ほど下流に架かっていた。

歌川広重晩年の浮世絵版画集「名所江戸百景」中に「大はしあたけの夕立」という絵がある。画集中でも屈指の傑作の一つである。新大橋の橋上で夕立に遭遇し、思い思いの格好で江戸から逃げようとする人々、江戸の夕立の風情を、詩情豊かな筆致で描いている。この絵は、オランダの印象派画家ゴッホが油絵具で模写を残している。ゴッホは歌麿や広重の浮世絵版画に非常に強い影響を受け、日本に強い憧れを抱いていた。

新大橋という橋は隅田川で三番目に架けられた橋で元禄五年(一六九二)五代将軍綱吉のお声がかかりで着工し工期数か月で元禄六年冬に完成した。日本橋(隅田川)を渡して架けられた橋である。一つ上流の両国橋の旧名が大橋だったので「新大橋」と名付けられた。この絵は日本橋側からの俯瞰図で、新大橋を隔てて、隅田川の上流の対岸を望んでいる。俄雨でくすんだように見える対岸に幕府の御蔵蔵(おふなぐら)があり、ここにはかつて將軍の豪華な御座船・安宅丸(あたけまる)が係留されていた。故にこの付近は安宅(あたけ)と呼ばれていた。

新大橋東詰から下流に一町ほど行ったところに、深川の掘割「小名木川」が大川に合流する落ち口があり、その近くの小名木川北岸に深川芭蕉庵があった。架橋工事中、庵に在住していた芭蕉は橋が完成するのを楽しみにして、工事半ばに「初雪やかけかかりたる橋の上」と詠み、竣工の際には「有難や頂いて踏む橋の霜」とはしゃいでいる。それまで芭蕉は、江戸に入りすること数回、「野ざらし紀行」「鹿島紀行」「更科紀行」「奥の細道」などの旅と、そのあとの上方滞在から二年ぶりに江戸に帰る、深川の草庵を再興してもらって(第三次芭蕉庵)、そこに住んでいた頃である。芭蕉庵は第一次から第三次まで(芭蕉三七歳から五一歳まで)小名木川北岸のほとんど同じ場所に作られた。芭蕉には旅の名句が多いが、この深川芭蕉庵で詠まれた句も名吟が多い。人口に膾炙した「古池や蛙とびこむ水の音」「名月や池をめぐりて夜もすがら」などが代表句。

橋の完成を喜んだ芭蕉は、翌元禄七年五月に最後の旅に立した。同年九月大阪で病を得、翌月永眠。俳聖芭蕉遂に墮つ。江戸の夕立の風情がどんなものだったか、江戸の古老が大正年間新聞記者に語ったものが筆録されて残っている。

「『(江戸の夕立は) 西北から黒雲が湧き出して、日光筑波の雷がピカピカゴロリゴロリ、まず一陣の疾風が江戸へ突っかって来て、やがてポツリポツリとやって来て、たちまちザアツと盆を覆す、馬の背を分ける豪雨。池はあふれる、鯉はのがれて、溝(どぶ)へ逃げ出す、ものの小一時間、降って降って降り抜いて、ソレ蚊帳だ、ソレ線香だと騒いだ揚句、カラカラッと、一天が晴渡って、嘘のような好天気になるといった、あの夕立の豪快の景。」

夕立の後には、虹が出る、荷馬車が半身ぬれて通る、雪駄を穿き直して出懸ける、陽がカンカシあたって、日ぐらしが鳴き出す、何ともいえぬ夏の爽快な心をキレイサッパリ洗いあげてくれるといったもの。樹々の挨へ木切を打付けて駆出す。左官の土コネは、コネる盤台みたいなものを冠って行く。家根屋は家根板でうまく笠をこしらえてかぶつて来たのが、風で煽られ、バラバラになつてしまふなど、腹を抱えずにいられたかった……」

(四一回 西岡恒憲)

土佐高校生ガーナへ行く ガーナ研修旅行報告

土佐高校教員 竹田謙介

ガーナ高校生の日本研修旅行が十回を数えたので、今年はガーナへ行こう、というガーナよさこい支援会の呼びかけのもと、七月二三日・八月三日のおよそ二週間にわたり、土佐高校生十名(女子六名)、麻布高生十一名引率教師等総勢二十九名で日本高校生ガーナ研修旅行が行われました。周辺国ではエボラ出血熱が発症していましたが、貴重な体験を積み、全員無事に帰国することができました。

今回の旅行はガーナよさこい支援会の方々を始め多くの方々のご助力により実現致しました。この場を借りて改めて皆様に御礼申し上げます。以下に、生徒の感想を引用し、旅行の報告をさせていただきます。

野口英世博士研究室

七月二五日訪問。野口英世博士が実際に使用していた研究室とガーナ大学野口記念研究所を見学しました。生徒たちは遠い国の縁遠い話であった熱帯特有の感染症に対する過去と現在の取り組みに触れ、感動と驚きがあったようです。



(高二・石田夢翔)

日本に所縁のある野口英世が生前使っていた研究室などが残っているということに驚きました。野口英世だけではなく、彼らの研究のおかげで、現在の私たちが安心してガーナなどのアフリカに行けるので、彼らの功績は本当に大きいものだ改めて感じました。野口英世が生前、本当に使っていた顕微鏡が当日はなかったのが少し残念でしたが、機会があれば、一度見てみたいと思いました。日本とガーナ双方にとっての偉人だと思うので、ここからもっと日本とガーナの関係が深くなれば良いなと思います。

エルミナ城と ケープコースト城

七月二六日・二七日に訪問。いずれも奴隷交易に使用され、「負の世界遺産」に登録された城塞です。奴隷の監禁部屋や懲罰房、door of no return(奴隷を船に突き落とした出口)などが今も残されており、生徒たちは当時の奴隷に対する残忍な扱いに衝撃を受け、人類の歴史の一端を覗いたようです。

エルミナ城を見学すると、奴隷貿易の様子がひしひしと伝わってきました。現地のガイドの説明を聞くと、私が考えられないような

サッカー親善試合等

大統領府や日本大使館訪問、外務大臣主催の昼食会出席、特産品

酷い当時の状況が見てとれ、すごく驚きました。その一つに、換気もろくに出来ないような洞窟のような所で、トイレも垂れ流しのまま食事もうくに与えられずに、閉じ込められていた奴隷たちのことを考えると、人とは思われていない扱いにすごく衝撃を受けました。私がこの歴史を知ったことで何ができるというわけではないけど、このことを人びとがもっと知らなければならぬと思いました。

(高二・山本茉莉子)

ホームステイと ガーナ人の生活

ホームステイも行われ、生徒達はガーナの様々な習慣、異なる文化に触れ、自分の現

在や将来の生き方について考える良い機会となりました。生徒のガーナ滞在レポートを以下に引用します。

①半強制ショッピング

最終日に行ったアートセンターに多大な衝撃を受けた。センターというより、市場というイメージだ。敷地内に入るとすぐに声をかけられる。気を引こうと皆一生懸命だ。まずアフリカンな楽器が欲しかったから楽器がある一角に入った。二つ楽器を買うことにして値引きを頼む。正直な所、日本で値切りはほとんどすることが無いから面倒くさくてたまらなかった。二〇セディ(一セディ約三〇円)くらい下げてもらい購入。ところが店を出ようとしたら手を掴まれもっと買っと頼まれる。その必死さは日本では見ることもないので、国が違うと改めて感じた。



買い物をし、五セディお釣りをくれと頼むと、五セディの別の商品を勧めてきた。買う、といったら、二個買って、三個買ってさらに勧めてくる。それは日本のスーパーマーケットのようなクールな感じではなく、少しでもお金を稼ぎたい、という熱情があり、日本との違いを感じた。

②信号が少ない。速度規制がない。交通事故が少ない。

日本は信号が多く、速度規制も厳しく、交通事故も多い。ホストファミリーとサファリパークへ行くのに時速一二〇km超えを経験した。その時、長男のキィに速度制限はないのか?と聞いた。一応ないらしい。信号も都市部にしかない。ただ危険な所には路面に段差が用意され、速度を抑えるようになっている。これは日本に無いシンブルだが面白く意味のあるシステムだと感じた。設備としては圧倒的に日本の方が進んでいると考えるが、交通事故についてはどうか。キィになぜ日本には速度制限があるか聞かれた。それは交通事故を恐れるからだと言えたが、全く興味は無さそうな様子だった。事故に対してあまり意識してないらしい。日本人は自分の愛車にかすり傷一つで大騒ぎするが、ガーナ人は自分の車に傷が少しついたところであり気にしている様子はな

い。交通事故自体の定義が変わってくるのだ。私はここに人間の考え方の違い、ある対象を気にするレベルの違いが生み出すものの大ささを感じた。

③キリスト教

宗教は何かと聞かれ神道と答えましたが、これといった反応もなくホストファミリーと初日の晩ごはんを頂いた。翌朝五時から

devotion。家族皆集まり聖書を開いた。最初何かが歌い始める。

内容が神への感謝を表現するもので、歌が終わると聖書を読む。初めてキリスト教の祈りを見た。お父さんの声が大きくて太くて少し怖かった。終わると立ち上がった手をつないで歌を歌う。終わった後、お父さんに理解しているか聞かれ、半分ぐらいと答えると、説明してと言われた。抽象的では



約が必要なレベルの高い質問に戸惑っていると、お父さんは簡単に説明してくれた。その夜、長女がキリスト教のレッスンをしてくれた。宗教にこれといった意識をもつことが少ない私は違和感があったが、英語と宗教の良い勉強になった。翌朝、ブレゼントを交換した。そのとき頂いたのは、ガーナの伝統的な布柄のリュックサックと聖書だった。キリスト教を勉強すべきだよという言葉とともに。

①文化交流

一willy ty. (高二・北村耕眞) (注：国民の約半数がキリスト教、一五%がイスラム教、その他伝統宗教)

最後に、中学二年から原宿スパーよさこいに参加し、今回のガーナ研修旅行に参加した生徒の感想を紹介しましょう。

①文化交流 中二の時から毎年スパーよさこいに参加し、四年目となる。ガーナ人との交流を深める度に、アフリカへ行ってみたいという思いが強くなり、ついに今夏、ガーナに飛び立つことができた。

ガーナの地では、奴隷貿易の歴史を学んだり、お互いの国の食習慣について話し合ったりした。また、日本ではどんな顔立ちの人が好まれるのか聞かれたり、「ガーナは快適だが、日本は台風があるので怖い」と

話しかけられたりもした。また、ガーナ人は蟬に馴染みが無いようで、アフリカには蟬よりも恐ろしい生き物がいるのに、得体の知れない虫を見て逃げる生徒もいた。この四年間、ガーナ人と共に過ごした時間を合計すると二十二ヶ月程になる。思い起こせば、初めはガーナ人に話しかけられず、会話をしても拙い英語を駆使して二言三言交わすぐらいだったが、今では、話題についていくこともでき、ジョークも言いあえるようになった。来年はこのプロジェクトに参加できないが、是非また交流したい。その時は、ガーナ人として難しい話題を議論する力をつけておきたいと思う。



②スパーよさこい

本番は昨年より暑い中、僕は最前列で踊った。そんな中、上手く踊ろうと指先から足の先まで力が入り、全身全力で踊り疲労困憊状態だったが、周りの仲間からのaye contactで元氣は続行…。

ラストまで踊り切った時、高校生活最後のスパーよさこいにふさわしい集大成を飾られたなと思った。高知のよさこい踊りを国を超え共有し、一体感を感じたことは、一生忘れられない思い出になった。

③last party

ガーナ人と麻布の生徒達との楽しい一時。そして別れのパーティー。毎年、ガーナ人は個性あふれるダンスを披露してくれる。僕達もそのリズムに吸い込まれていく。今年は、妹も母もパーティーに来て、母の視線を気にしながらも、ガーナの子生徒と踊ることができた。これもいい思い出のひとつだ。

今までのガーナ交流の経験は、将来を考える上での道標になった。世界は広い。遠いアフリカで助けを必要としている人がいる。そこで働いている医療従事者の自分の姿を想像してみた…。

最後に、スパーよさこい、そしてガーナ訪問の夢を実現して下さった支援会の方々、先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。これからもお元気で、僕たちの成長を見守って下さい。四年間ありがとうございました。

(高二・古澤海風)

第二八回 土佐ハイクの会

霧の浅間隠山・花を楽しんだ根子岳

三七回生合作

ここ数年最多の参加者三四名を得て、今回のハイクの会は九月六日と七日に実施した。

に居残る「バス組」の新語が生まれた。健脚散策組は頂上で三六〇度のパノラマを楽しんだ。

一日目 浅間山を望む

二日目 草花の歓迎

初日の隠山（かくしやま）は二つの峰を擁しているので、熊笹の生い茂る道をジグザグに登り前峰に至る。そこからはやや急な最後の登りが入るのだが、一時間半くらいで頂上に立てる。この日は霧が深く、周りが良く見えない状況ではあったが、頂上でお昼ごはんを済ませたところから霧が風で飛ばされ、浅間山をうっすらと望むことができた。岡野さんの息子さん二人（小二と小一のひで君とあき君）も二年ぶりに参加し、元気な声で先頭に立って歩き、老人たちを鼓舞し、笑わせた。

一方散策組は先ず日本初の彩色映画「丘を越えて」の口ケ地、浅間牧場へ。眺めの良い四阿で弁当を広げた。目標の天丸山は意外に遠く途中で到達を断念、次の小浅間山へ向かう。標高差二五〇mの散策はキツイとバス

二日目の根子岳は花の百名山と呼ばれている。初夏から初秋にかけて登山路の至る所に色々な高山植物の花々が咲く。この日の参加者は激減して、ひで君とあき君を含めて、十人となった。橋田夫人、森君、池田君、濱田夫婦、金沢さん、岡野さん、家族、そして馬田君の友達の吉川さん、である。ダケカンパの樹林帯に入り、前日の雨で水たまりが所々にある道をしばらく登るとやがて森林限界とこ

ついでから尾根を降りて四阿山に向かう予定であったが、前日の雨が四阿山への登山路をぐちゃぐちゃにしているとの話もあった。根子岳の頂上でゆっくりすることにした。さわやかな風に吹かれて、ゆっくりとお昼ご飯を楽しみ、散策組が登っているはずの高峰高原や反対側の戸隠連峰を眺めて、「今日はこんなに晴れて、良かった、来た甲斐があった。」と言いつつ合った。

その散策組は地藏峠から先ず湯の丸山へ。スキーリフトの下急坂を、放牧の牛の糞をよけながらのスタートで、昨日より百m高く登るのはしんどかったが頂上からの眺めは絶景で達成感もひとしお。後半は池の平湿原へ、こちらはホンマの散策コースで湿原を巡る木道を竜胆、薊、松虫草、秋の麒麟草等を愛でつつ初秋の澄んだ空気を満喫した。



途に就く、上信越道の上田菅平インターの手前で天然温泉につかり気分一新、恒例の車中俳句&川柳大会で盛り上がった。両日共に交通渋滞はなく天候にも恵まれ、今回も楽しいハイクの会であった。

俳句の部・優秀作品

- (天) さざ波の池塘でゆれる羊雲
(地) 山晴れてたゆとう紅や吾亦紅
(人) リンドウとアザミ群れなし紫(し)を競う
川柳の部・優秀作品
(天) タコ・カメと動物園かよ土佐ハイク
(地) 景色よりトイレ気になるバスハイク
(人) 土佐弁を忘れぬための土佐ハイク

中村裕子
中島宏
岡田四郎
橋田正幸
中島宏
森郁夫

次回のハイクにご一緒しませんか。
参加希望の方は、ご連絡ください。

橋田正幸 (37回生)

アドレス: hashida.yokohama@nifty.com

行程表

登山組 1 日目: 浅間隠山登山 1726m (3時間)

2 日目: 根子岳登山 2206m

散策組 1 日目: 浅間牧場散策

2 日目: 湯の丸山・池の平湿原トレッキング

ANTENNA／取材日記 筆山会ランチ・ゴルフ 平日午後の過ごし方



ランチ事務局 前田憲一
kmaeda@s4.dion.ne.jp

一方、筆山会森健
（二三回生）会長た
ち健脚組は、第六七
回ゴルフコンペ。神
奈川県大厚木カント

当会では、同好の士を募集してお
ります。ご連絡ください。

は平成二七年五月二日です。

優勝は、地の利を生かして地主の
益弘さん、準優勝は経験に物を言わ
せて森会長、三位には初参加の田中
さんが輝きました。運動の後は、反
省やら近況やらが飛び交う親睦会を
楽しみ秋の一日は暮れました。次回

間を過ごせた。
また、解説者ぞろい
で、大変有意義な時
料を持ち寄ったの話
のネタは尽きない。

楽しみました。

リ一本コース（西南）にて、台風通
過後のさわやかな秋風の中開催され
た。二三回生から七六回生と年齢差
五三歳。土佐のつわものどもが、十
名三組でスタート。和気藹々と土佐
弁も高らかに縁あふれる丹沢山系を

毎月第三木曜日の十二時。ホテル
ニューオータニのガンシップには筆
山会のメンバーが集まる。昭和五十
年頃、総会だけでなく、ランチで集
まろうと発足。ガンシップに定着し
て二十年になる。大きな窓のある角
部屋はランチ会にはぴったりの明る
い部屋。早めに着いたメンバーで、
四万十川の語源はアイヌ語説の話題
です。すでに盛り上がりつつあった。メニュー
から各自が好きなものを注文。（ワ

九月には中城先輩の『浮世絵に描
かれた子供達について』、十一月は
西内先輩の『クロア
チアの城を訪ねて』
とお話を企画。資
料を持ち寄った話
のネタは尽きない。

に、高知県人の革新的
気質を誇らしく語った。
高知県議会が【活動費
を十四年度分から全面
ネット公開】を全国初
で決定というニュース



ゴルフ事務局 小松三男
k0matu12@ae.auone-net.jp

編集後記

各世代の方々の情報を伝え
たい。執筆を若手の方へも依頼
しようと考えて第五七号の編集
を始めました。今号の七四回生
の巻頭ページはとも若々しく、
人気者女流棋士としての彼女の
活躍を応援したくなります。今
を迎えます。

後も七〇回生以降の方の様子を
取り上げていきたいです。
さて、『筆山』第一号創刊。
阪神バックスクリーン三連発、
そして日本一。【8時だよ全員
集合】放送終了。「スーパーマ
リオブラザーズ」発売。これは
いずれも、一九八五年の出来事
です。来年『筆山』は三〇周年

関東支部に写真同好会誕生 会員募集中！

筆山会新年会や土佐高ハイクの会などで素晴らしいアルバム
をつくってくれた沢村武彰さん（38回）を中心に、筆山会
森健会長（23回）を塾長にお招きし、写真同好会がその名
も「土佐高写真塾」として誕生します。森塾長のもとに現在
スタジオを経営中の写真家弥勒展丈さん（37回）、濱田継
夫さん（37回）に橋田恵美子さん（高知学芸高9回）達も
加わりました。豊かな自然のふとくろで、また古都での撮影
会、個展開催などと夢は広がります。が、まずは高級カメラ
派、スマホ・デジカメ派など流儀にとらわれずみんなで集まっ
て話し合うサロンのような雰囲気から始め、その中で活動内容を相
談して行くつもりです。土佐中・高校同窓生、そのご家族・
友人などどなたも歓迎です。発起人一同皆様の参加連絡をお
待ちしています。

入会金無料・年会費¥1000

連絡先：橋田正幸（37回）

携帯電話：090-4946-2295

PCメール：hashida.yokohama@nifty.com

携帯メール：masayuki.yokohama0830@docomo.ne.jp

公文俊平 (28回生)

●「情報社会のソーシャルデザイン：情報社会学概論II」
 <2014.11 ¥3,672 エヌティティ出版>

鍋島高明 (30回生)

●「介良のえらいて」
 <2014.10 ¥1,296 五台山書房>

田島征彦 (34回生)

●大型紙しばい前編・後編
 「じごくのそうべえ」
 <2014.9 ¥18,360 童心社>

西村繁男 (40回生)

●「わらってる わらってる」
 <2014.6 ¥1,296 クレヨンハウス>



●「ないてる ないてる」
 <2014.6 ¥1,296 クレヨンハウス>

黒鉄ヒロシ (41回生)

●「韓中衰栄と武士道」
 <2014.9 ¥1,620 角川書店>



森崎初男 (41回生)

●「経済データの統計学」
 <2014.8 ¥2,808 オーム社>

高山宏 (42回生)

●「世界の庭園歴史図鑑」
 <2014.9 ¥16,200 原書房>
 ●「オルフェウスの声；詩とナチュラル・ヒストリー」
 <2014.10 ¥6,480 白水社>

西田博 (47回生)

●「矯正職員のための法律講座」
 <2014.4 ¥3,024 東京法令出版>

宮岡等 (49回生)

●「こころを診る技術」
 <2014.7 ¥2,700 医学書院>
 ●「心身医療のための認知行動療法ハンドブック」
 <2014.7 ¥3,564 新興医学出版社>
 ●「うつ病医療の危機」
 <2014.6 ¥2,160 日本評論社>
 ●「精神医学の羅針盤—精神科の五大陸をめぐる冒険」
 <2014.7 ¥2,484 篠原出版新社>

村木厚子 (49回生)

●「自分の『ものさし』で生きなさい」
 <2014.9 ¥1,512 日経BP社>



阿部知暁 (51回生)

●「木のぼりゴリラ（たくさんのふしぎ2014年10月号）」
 <2014.9 ¥777 福音館書店>

坂東眞砂子 (51回生)

●「10分間の官能小説集3」
 <2014.9 ¥540 講談社>



門脇護 (60回生)

(ペンネーム 門田隆将)

●「慟哭の海峡」
 <2014.10 ¥1,728 角川書店>
 ●「『吉田調書』を読み解く」
 <2014.11 ¥1,404 PHP研究所>



英保未来 (54回生)

(ペンネーム 大森望)

●「NOVA+バベル」
 <2014.10 ¥994 河出書房新社>
 ●「はい、チーズ」
 <2014.7 ¥2,160 河出書房新社>

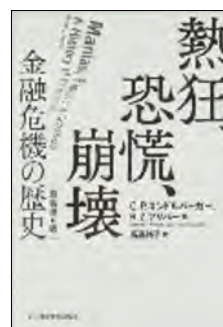
森岡浩 (55回生)

●「家紋と名字」(別冊宝島 2190)
 <2014.5 ¥896 宝島社>

廣瀬裕子 (60回生)

(ペンネーム 高遠裕子)

●「熱狂、恐慌、崩壊」
 <2014.9 ¥3,888 日本経済新聞出版社>



私の一冊

『百年構想のある風景』

俣士銑太 (四九回生)

本書からは、日本サッカーの「地域との共生」と「あらゆるスポーツとの共存・発展」を願うJリーグ関係者の熱い、真摯な想いが伝わってくる。

目下充電中の著者が、再び世界を駆け巡り、日本サッカーの美質を世界に広め、海外のサッカー文化とサッカーの楽しさを、いま一度日本に紹介してくれることを願ってやまない。氏の愛するサッカーのために。

四一回生 鶴和千秋



<2014.11 ¥1,620
 ベースボールマガジン社>